



見放さない

鎌田 實の

題字は本人

28

もの心の空腹感
なのです」

お茶のいれ方を知らない子どもがいるという。親が買ってくるペットボトルのお茶しか飲んだことがないらしい。そんな時代の流れを、竹下は食い止めようとした。この子がいつか「仕返し弁当」ではなく、お母さんに「愛情弁当」を素直につくってあげられる日がくることを、竹下は祈っている。

小学5年の女の子が感謝弁当をつくった。お父さんのため、おばあちゃんのため、そして自分のため。お父さんは単身赴任。土日にないと香川県に帰ってくる。月曜の朝に大阪に行く。その新幹線の中で食べてもらうための弁当だ。お父さんは、娘が5時に起きて弁当をつくっているのを見て泣き、その弁当を受け取る時に泣き、新幹線の中で食べながら、泣いた。会社に書いて、昼休みに自宅に電話をかけ、「おいしかったと、必ず娘に伝えてくれ」と泣いた。うれしかったのだと思う。

2つ目の弁当は、病院に入院しているおばあちゃんのところへお母さんが持っていった。おばあちゃんはベッドの上に正座をした。「自分は結婚以来、たぐさんの弁当をつくってきた。ただ、つくってもらったのはこれだけだ。これだけだ。」

おばあちゃんも泣きながら食べた。

弁当を通して、この家族の様子が見えてくる。自分のつくった弁当を、おばあちゃんやお父さんが泣きながら食べてくれた。そんな体験をした子どもは、どんなことがあっても生き抜くと思う。自分の存在している意味を実感できる。人は一人で生きていけないというところが、体験的にわかっただろう。

「弁当の日」を通して、子どもが変わる、学校や家庭の空気が変わる。そして地域も変わっていった。「旬の素材でつくる弁当の日」、畑やスーパーの野菜、森の山菜やキノコに気が行くようになった。「冷蔵庫の残り物でつくる弁当の日」で、もったいないということを感じた。弁当をつくらなくなった。みんなが応援するようになった。四国の山の中の小さな学校では、じまった小さな取り組みが500校以上に広がった。ほくは、日本中の学校に広げる応援団長になることを決めた。

(かまた・みのる 長野・諏訪中央病院名誉院長)

(今回は11月15日です)

心も満腹「弁当の日」 小中学生が自分で作る

四国の香川県の小さな小・中学校の校長をつとめてきた竹下和男という男に興味をもった。この男を応援したくて、二人で「始めませんか 子どもがつくる「弁当の日」」(自然食通信社、今年21日発売)という本をつくった。学校で調理実習をした後、自分で弁当をつくって持ってくる「弁当の日」というイベントをはじめた。「弁当の日」をやるかと提案したとき、学校の教師は乗り気ではない様子だった。父母も、冷やかな反応だったが、何とか教師やPTAの了解をとりつけた。弁当づくりには、教師や母親は手を下さないという約束をした。子どもたちは自分の手で弁当をつくりはじめた。「弁当をプレゼントする日」には、2つの弁当をつくり、一つは大切な人にプレゼント。もう一つは自分で学校で食べる。ある子は必死に料理を習って、胸前を上げた。しかし、プレゼントの当日、まるで違った弁当をつくって持ってきた。百多冷凍食品。その理由に驚いた。「私は中学3年になるまで一度も親の手料理を食べたことがなかった。だから、母には仕返し弁当をプレゼントする」竹下和男は言う。「私は手間をかけて育てる価値のない存在なのかという親への問い。それが子ども

鎌田実 竹下和男



筆者と竹下氏の対談をまとめた「始めませんか 子どもがつくる「弁当の日」」の表紙